

学生個人を大切にした 総合的支援の推進

エンロールメント・マネジメントと
個別対応教育モデルの実践的融合



(1) 学生支援に対する理念や目標

京都光華エンロールメントについて



建学の精神を具現化する取組

- 校訓「真実心」（＝慈悲の心）
- 教育理念としては
“一人ひとりを大切にする”ということ
- モットー
「一人ひとりの輝ける未来のために」
- 個別対応教育と、その成果を丁寧に高めていくためのエンrollment・マネジメント（EM）は、
いわば京都光華女子大学における教育のアイデンティティにかかわる取り組み

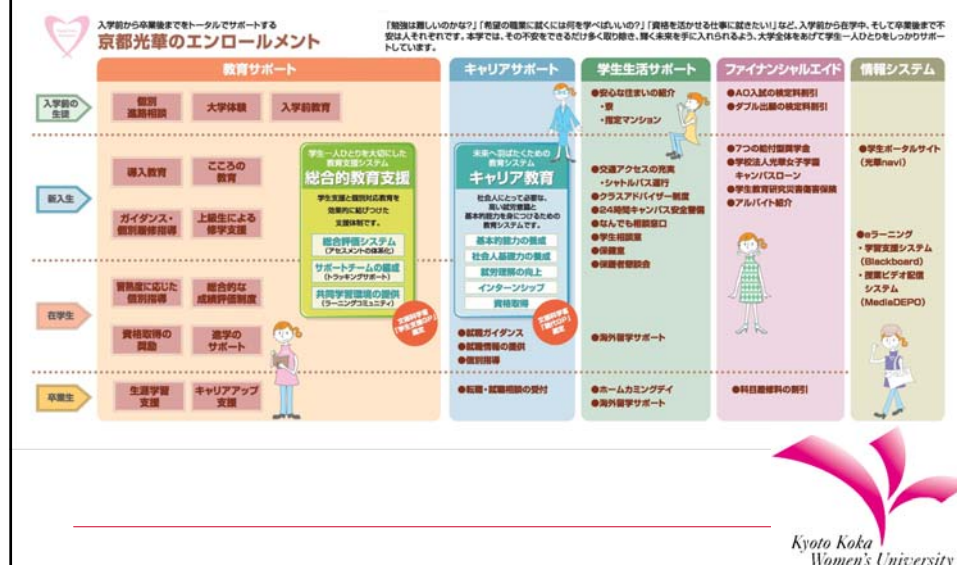


組織的な人材育成という教育モデル

- 個々の学生に対する入学前から卒業後にいたるまでの学生生活支援と個別対応教育の有機的運用を通じて、学生の不安や疑問に徹底的に対応し、さらにその過程で主体的な学習意欲を引き出すことによって、より高度な水準で教育理念と学力の達成を図るという教育モデル
- 個々の授業担当者がバラバラに教育（＝断片的な専門知識の伝授）を行うのではなく、学内の業務すべてを接続することによって、一人ひとりの学生に教職員全員が組織として体系的な教育（＝総合的な人材育成）を行う、ということである



EMの具体的な政策



現在の取組の実施後の評価

- 修学面の取り組みに先行した人間科学部において、平成19年度における1年生のGPAが前年度比で0.13ポイント上昇
- 平成18年度の1年生退学率6.78%に対して、平成19年度は4.36%にまで低下
- 4年後に、全学年のGPAを0.5ポイント改善し、大学全体の退学率を2%台にまで低下させることが目標



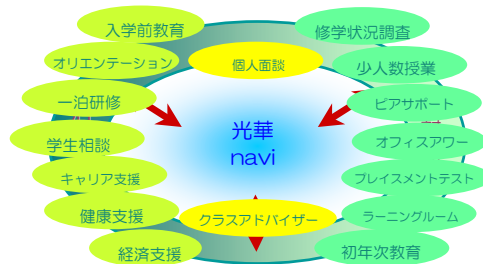
(2) 学生支援に対する現在の基本的な取組の状況

支援の結節点「光華navi」



生活支援と個別対応教育を結ぶ

- 教員は学生の氏名を暗記し、個別対応教育を実践
- データは光華naviに集約
教職員が連携して学生生活支援を実施
- さらに、光華naviを結節点として、学生が置かれた状況をトータルで把握する
- 全学的な情報の共有と組織間の情報断絶の解消による個々の支援策の連携
- ただし、光華naviの有効性を担保する「個人面談」「クラスアドバイザー」制度は属人的で教員の力量に左右される欠点



新たな取組へ

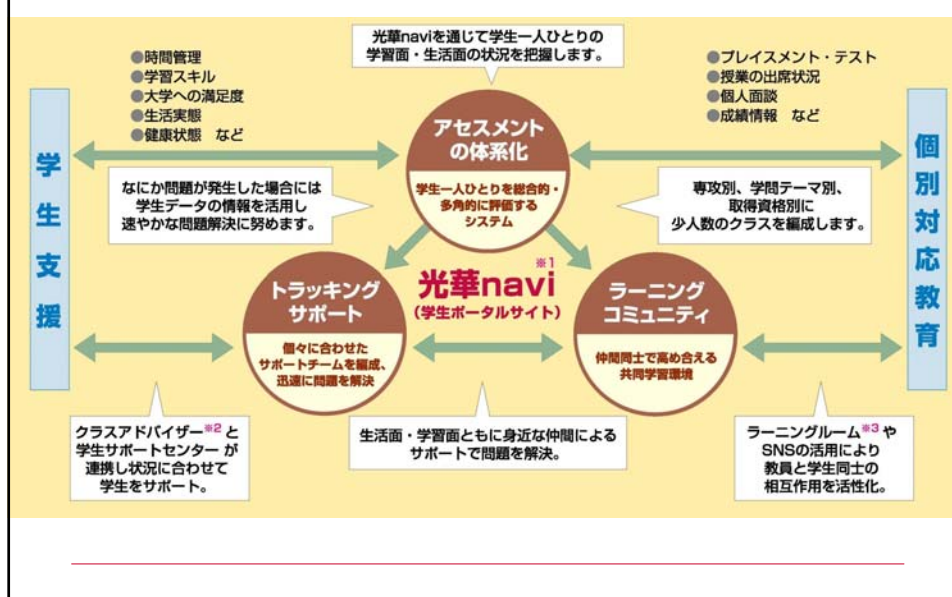


(3) 新たな取組の趣旨・目的

- ① アセスメント
- ② トラッキング・サポート
- ③ ラーニングコミュニティ

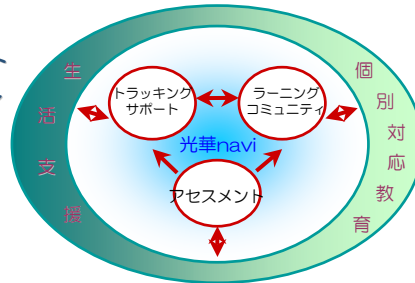


取組のイメージ



隙間と取りこぼしのない支援

- ①アセスメントの体系化
②トラッキング・サポート
③ラーニングコミュニティ
という3施策を有機的に接合する



- それにより、学生支援と教育モデルの統合度をさらに高め、隙間と取りこぼしのない支援を実現し、創発的な学生支援効果を増幅させる



アセスメントの体系化 — 学生が現在おかれた状態の統合的把握 —

- 修学状況調査（出席率等）、個人面談、成績情報（GPA）といった学生評価情報を指導の参考に活用しているが、個々の学生が現在おかれた状態を統合的に把握するには至っていない
- そこで、学習時間、学習意欲、教員との接触度、自己評価、時間管理、学習スキル、大学への満足度、生活実態、配慮すべき健康状態、といった広範な項目を含むアセスメントを新たに開発し、全学年を対象として調査を実施する



トラッキング・サポート ー不登校ゼロの達成ー

修学状況調査やアセスメントに基づいて特別な配慮や指導が必要な学生のリストを作成 → **学生の分類**

- (a) 基礎学力不足や成績不良によって卒業が危険視される学生
 - (b) 出席率が低く、課題の提出を怠りがちな学生
 - (c) 学力には問題ないものの、対人困難やアパシーによって欠席しがちな学生
 - (d) リストから除外してかまわない学生
- (a) に対してはクラスアドバイザーが定期的に面談を行い、ラーニンググループと連携しながらGPAが改善するまで常に成長を見守る
- (b) に対しては学生サポートセンターが中心となって、ウェブ、メール、電話、手紙を用いて継続的にカウンセリングを行う
- (c) に対しては、関係者全員で情報を共有し、継続的にカウンセリングを行いながら、ラーニンググループやラーニングコミュニティを受け皿とする学習活動への参加を促す



ラーニングコミュニティ（LC） ーピアサポートの充実による教育効果の向上ー

- ラーニンググループを核としながら、個々の科目を関連付けたコア・カリキュラムと自宅学習を連結することにより、人為的に**共同学習環境**を構築するプログラム
- 第一に、専攻別、学問テーマ別、取得資格別に少人数のクラスから構成される**コア・カリキュラム**を設定し、その担当教員と履修者をLCの構成員とする。学生は最低一つのLCに属するが、学年、学力、関心にあわせて複数を選択できる
- 第二に、同じLCに所属する学生には、**お互いに学習上の支援**を行うように奨励する。そのために、正課の授業の中で、**LCでのグループ学習課題**を与え、ラーニンググループの活用を促す。また、LCに属する教員は、オフィスアワー以外にもラーニンググループでLCの学生を指導する時間を設定する
- 第三に、同一のLCに属するユーザーが同時に光華naviにログインしている場合、オンラインでインスタントメッセージを送信できるようにすることで、自習者が情報を交換できる環境を整える（**バーチャルLC**）



(4) 新たな取組にともなう教育改革

- ① 組織単位の教育へ
- ② 教職員による人格形成へ
- ③ 共同体単位の学習へ
- ④ 学習者中心の教育へ



教授（教員）単位の教育から組織単位の教育へ

- アセスメントを体系化するためには、既存の学生評価情報とその利用をIR(Institutional Research)*部門で一元管理する必要がある。
- その前提として、個々の授業担当者がバラバラに教育（＝断片的な専門知識の伝授）を行うのではなく、組織として体系的な教育を保証するという意識が必要となる。
- チーム・ティーチングならぬ、チーム・エデュケーションというところか。

*大学評価。大学経営支援活動の一つとして実施される。九州大学に詳しい例がある。
<http://hyoka.ofc.kyushu-u.ac.jp/hyoka-joho/katsudo/kotokyoiigakkai2008524.pdf>



教員による教育から教職員による人格形成へ

- トラッキング・サポートを円滑に運営するためには、教員が情報を独占するのではなく、**教職員が情報を共有することが重要。**
- その前提として、学内の業務すべてを接続することによって、教職員全員が組織として一人ひとりの学生に体系的な教育（＝総合的な人材育成）を行うという**意識が必要**となる。



個人単位の学習から共同体単位の学習へ 教員中心の教育から学習者中心の教育へ

- ラーニングコミュニティを無理なく導入するためには、個々の任意の科目でグループ学習を行う程度ではなく、原則としてすべての科目で**全学的にグループ学習を行うという意識**が必要である。
- そのためには、2つの理解が教職員に浸透していなければならない。
 - ① 学習は個人でやるよりコミュニティ単位でやるほうが効率的だという理解
 - ② 教員がどう教えるかということより、学習者がどう学ぶかのほうが重要だという理解
- 京都光華女子大学では、教育モデルとして「個別対応教育」をキーワードとしているが、今後は学習モデルとして「**共同体学習**」もキーワードに付け加わるだろう。



本年度の主な実施事項

■ アセスメント

- 出席管理システムの試行と分析
- GPA、満足度調査、学生授業評価調査等の分析
- 学生意識・動向調査の設計

■ トラッキング・サポート

- 支援法判断のための学生の類型化
- 要支援学生の判定と支援のための手順の作成

■ ラーニングコミュニティ

- 事例調査
- 試行計画の策定

■ ICTシステム

- 光華navi専用端末の導入
- オンラインコミュニティ用システム（SNS）の導入
- 光華naviファイルキャビネット機能の開発
自宅と大学でのシームレスなファイル利用の環境



ご静聴ありがとうございました。

京都光華女子大学

